

タイトル 『親シラス』 作 福山啓子

登場人物 女性2名

女 三三歳。法律事務所事務員、夫と三歳の息子と三人暮らし。
母 六三歳。専業主婦。女のアパートの近くに家がある。夫と、息子夫婦の二世帯住宅。

時 現代。今より少し前、携帯電話のなかった頃。
場所 都内の女のアパートのダイニングキッチン。ひたすら雑然としている。壁に鉛筆やクレヨンで書きなぐった子どもの絵が貼ってある。

第一場

十月の午後三時頃。晴れ。

幕あくと無人のアパート。すぐに女が一人で帰ってくる。紙袋とバッグ、疲れた様子でダイニングキッチンの椅子に座り込む。おかしくはないが、けしてお洒落とはいえない垢抜けない服装。ノーメイク。スリッパの下にザラザラした感触があるので下を見る。子どもの食べこぼしが散らかっている。無視しよつとして足を動かしているが、あきらめてテーブルの上のティッシュボックスからティッシュを取ると机の下にもぐりこんで食べこぼしを集め始める。

そこへ母親が入ってくる。地味だが年齢相応のきちんとした格好。紙袋を持っている。

母 何してるの。

女 (見て) あれ。母さん。

母 寝てなきやだめじゃない。

女 ー。(掃除をやめない)

母 やめなさい。箒は。

女 無い。掃除機ならあるけど？

母 ないの？(バスルームの方へ) 雑巾は？

女 洗濯機のとこにない？

母 どこよ…あつた。(絞って持ってくる)私やるから。寝てなさい。(机の下を手早く掃除する)

女は立ち上がって椅子に座る。

母 足あげて。

女は座ったまま足をあげる。母はその下を拭く。

母 んもー…、真つ黒だよ。見てごらん。(雑巾を見せる)

母 女 よく平気だね。

母は拭き終わって立ち上がり、バスルームへ。

母 (戻ってきて)布団敷いてあげようか。
女 いい。縦になつての方が気持ちいいから。

母はペランダへ出ていく。女はぼつつとしている。

ややあつて洗濯物を抱えて母が入ってきて、テーブルの上に置く。そして、椅子の上に置き、台拭きを持ってきてテーブルを拭きながら

母 きつたないねー。
女 すぐこぼすんだもん。

母 (見せて)ほれ、こんなんだよ。(拭き)ビニールクロスってあんまりよくないね。な
女 くてもいいんじゃない？

傷ついちゃうよ。

女 病院にいったらもう帰ったなんていうからびっくりしちゃった。

女 来なくていいのに。

女 タクシー呼んだの。

女 呼ぼうと思つただけど、なんべん電話してもお話中でつながらないの。頭きて、大
母 通りまで歩いていって自分でひろつてかえつてきちゃった。

迎えに行ったのに。

女 いいよ。大したことないんだから。

洗濯物をテーブルにのせ、二人でたたみ始める。手際のいい母とぞんざいな娘。

母 いいよ、私やるから。
女 ん。(続ける)

母 無茶したら駄目だよ。あとあと響くから。

女 病院じゃ何も言わなかったよ。

母 普通は言われなかったって気をつけるんだよ。

女 もう三度目だから。大体わかっているし。

母 三度も続けて流産なんて。あの病院おかしんじゃないの。

女 別に病院がおかしいわけじゃないよ。定期検診に通つてただけだもん。

母 ちゃんと診てくれるの。

へえ。

おかしいと思わない？人間の赤ん坊を牛のおっぱいで育てるの。あつちゃんの時おっぱいで苦労したからもう中央病院は嫌。高橋産院は母乳育児だし、自然分娩だし、母子同室だし、いいなと思って。

母乳育児は結構だけど、そのために食事制限するのはどうなの。あれも駄目これも駄目……。

食べてるよ、ちゃんと。アレルギーが出るから、大豆と卵を牛乳は控えめにして、油と砂糖も控えめ、自然食って要するに和食中心ってことよ。ヘルシーでいいでしょ。

子育ても仕事もしてるんだから。そんなに制限したらへるへるになっちゃうじゃない。体力落ちてんじゃないの。
そんなことないって。

間。

でも今の子育ては楽になったね。昔は洗濯機もなかったから、冬でも鹽で布のおむつ洗ったんだよ。寒くて冷たくて、あかぎれでひびいて、もつ痛いのなんの……。雨が降ると家の中にいっぱいおむつ干してね。紙おむつなんてなかったから。コインランドリーもないし。かわかなくてかわかなくて、しょうがないからオムツにアイロンかけてかわかしたんだよ。

へえ。

お父さん全然手伝ってくれないし。

忙しかったから？

家にいたって何もやらないよ。泣いてたってあやしてくれるわけでもなし……。

ふーん。うるさいと言ったの？

そういうことは言わないんだけど。大体お父さんに怒られたことってないでしょ、あんた。

うん。いつペンだけ、マッチをばきばき折って遊んで「メッ」って怒られたんだよ。ね。いくつの時だった。

（笑って）4つくらいかな。怒られてから私のとこにきて「トータン、マッチメッテ」って泣いて泣いたんだよ。

覚えてないや。

マッチだってもつたない時代だったからね。

葉書が五円、封書が十円だよ。ラーメン一杯八〇円くらいだった。

そうそう。

たまーに池袋に出て、餃子会館で餃子食べるのが最大の贅沢でさ。

そうだったね。

ピフテキとかメロンとか夢のまた夢だったよね。

真一はお寿司が好きだったんだよ。いっぺんどこかへおよばれて味しめちゃって、「何食べたい？」って聞くときまっして「寿司」。お金ないから駄目っていつと怒ってね。困っちゃったよ。

わがままー。私は？

あんたはいつつも「ラーメン」。親孝行な子だったよ。

だろうなー。

できたよ。（シヤツと靴下を見せる）

ん。ありがと。

あつちゃんは何時に迎えにいけばいいの。

行ってくれる。いつもは6時なんだけど。

女 母 女 母 女 母 女

母 女 母 女 母 女 母 女 母 女 母 女 母 女 母 女

母

女 母 女 母 女 母 女 母

母 女 母 少し早く行こうか。その前に買物して。晩御飯何がいい。

母 女 私はなんでもいい。おかゆでいい。
あつちゃんはそのういかないでしょ。

母 女 んー…。シチューにでもするか。クリームシチュー。好きだから。
野菜ある？

母 女 人参、玉ねぎ、ジャガイモはある。シチューの素もあるから、あとお肉だけ。
じゃ買ってくるよ。作って食べさせてから帰るから。

母 女 買った物だけでいいよ。
まーた…。無理しないでゆっくり休みなさいよ。仕事の方も休んだら。
んー。

母 女 次はいつ病院いくの。

母 女 あさって。それで異常がなければ大丈夫でしょうって。
なるべく寝てなさい。

母 女 んー。

母 女 次の子は少し間を置いた方がいいね。あつちゃんまだ三つなんだし、そんなに二人目を急ぐことないでしょ。

母 女 うん。

母 女 どうしてそんなに急ぐの。

母 女 別にい。

母 女 一年半で三回目だよ。

母 女 ……私と兄貴って七つ半離れてるでしょ。

母 女 うん。

母 女 大人と子どもだよ。喧嘩もしたことないもん。なんか寂しくてさあ。よそんちがうらやましかったな。喧嘩したり一緒に遊んだり。

母 女 ……

母 女 いつもでたつても追いつけないんだよねー。兄貴って成績よかったじゃん、いい高校いったし。父さんと兄貴が話してるの聞いてても、全然話に入れなくて。自分の子どもにはそういう思いさせたくないかったんだ。それでかな。

母 女 ふーん。

母 女 そういえばさ…。どうして私と兄貴って七つ半も離れてるの？ お母さんも流産したの？

母 女 ……

母女 女の狭い家に？
母女 狭くないよ。このアパートよりよっぽど広いじゃない。
母女 えー。

母女 玄関があつて、次の間があつて、四畳半と八畳の寢間と六畳の居間があつて、あと台所と風呂場と縁側があつて…。

母女 いつ？

母女 戦後すぐの頃。

母女 誰が住んでたの。

母女 佐藤さんが奥さんと女の子二人連れて六畳に住んでたでしょ…。よく裸んぼで歩き回つてたっけ。

母女 誰が。

母女 その女の子がさ。まだ小学校前だったね。そんなに長くはいなかったけどね。よそを追い出されてすむところがないっていうんでさ。新婚の初夜がうちの押入れだっていう夫婦ものもいたんだよ。

母女 うそお。

母女 四畳半の半分、斜めにカーテンで仕切つてさ。それと三畳に若い男の人が三人。私とお父さんと真一。他にもいれかわりたちかわりていゝんな人がきて。

母女 なんて？

母女 みんな住むとこがなかったんだよ。空襲で焼けちゃつてまともな家がありません残つてなかつたから。うちだつて線路向こうは焼けちゃつたし、反対側も大塚の方までずーっと焼け野原でさ。あそこの一角だけペろつと残つたんだから。

母女 どうして。

母女 ケヤキの大きい木が何本もあつたからかな。それと風向きかね。

母女 へえ…。その人達みんなうちで食わしてやつてたの？

母女 まさか。そんなお金ないよ。自分の食べる分は皆自分でなんとかしたんだよ。バイトしてちよつとお金が入ると闇市に行つて雑炊食べたりね。

母女 ゴースイ？

母女 進駐軍の残飯をこつた煮にして売つてたんだよ。一杯十円くらいかな。

母女 米軍の残飯？

母女 ジャガイモが入つてるんでよく見たらさ。歯型がついてたんだつて。(笑う)

母女 食べるわけ、それを？

母女 何でもよかつたんだよ、おなかに入りゃ。

母女 ひどーい。

母女 でもみんな元気だったよ。日本をもつといい国にするんだつて。あの頃のお父さん…、復員して大学卒業してから青年運動に飛び込んだつて。

母女 ああ。

母女 民主青年団とか…。組織の新聞の編集長になつて飛び回つてたよ。戦後の、労働運動とか婦人運動とか、わーっと盛んになつた頃だからね。お金にならないことばかり一所懸命やつてたよ。

母女 お給料なかったの。

母女 どうかねえ、出てもほんのちよつとだよ。すぐ遅配になるし。

母女 それでどうやつて生活してたの。

母女 私が編物やつて内職したり、おじいちゃんから援助してもらつたり、質屋に行つたりさ。よく真一連れて行つたよ、池袋の質屋。

母女 へえ。

母女 八百屋に行つたつて野菜買つてお金なんてないんだから。お店が捨てた葉っぱ、ちよつと痛んでるのなんか、鶏にやりますからなんて嘘ついて買って帰つて食べたんだよ。

女 　　うっそー。

母 　　何回か買ったねえ、あの八百屋さん、もう無いけど。

女 　　恥ずかしくなかったの。

母 　　たぶんわかってたんじゃない、鶏なんてウソだって。でも何にも言わなかったね。…豆腐屋でおから買って煮付けて食べたり。そんなことばっかりしてた。それなのにお父さんたら次から次へ困ってる人やら居候やら連れてきて、お茶っば買っお金もないってのに、「お茶くらい出せ」って怒るんだよ。

女 　　何それー。

母 　　それから私が保母の仕事について。そのうちお父さんも就職して、だんだん良くなっただよ。…とにかく昔はみんな貧乏だったからね。…それに比べれば今は、ちゃんと食べられるし、住むところもあるし。大金持ちじゃなくてもちゃんと暮らせるもんね。

女 　　…。

母 　　（立つ）さあ、布団敷いてあげるから寝てなさい。

母は次の間へいく。

女 　　ねえ。

母 　　（声のみ）うん？

女 　　流産して泣いた？

母 　　（声のみ）忘れたー。

女はぼつと考えている。暗転。

続く